

URP GCOE Working Paper Series

No.1 August, 2008

セントラル

中環の価値の歴史地理観を超えて

シャティン

—「沙田の価値」を回顧する—

Transcend the Dominant Value of the Central District by Situating it
in its Historical Geography: A Reversion to Shatin Value

鄧永成 (香港浸会大学 准教授、URP香港サブセンター・ディレクター)
陳劍青 王潔萍 郭仲元 文沛児 (香港浸会大学 RA)

Wing Shing TANG, Associate Professor, HongKong Baptist University
Kim Ching CHAN, Tammy Kit Ping WONG, Chung Yuen KWOK
and Pui Yee MAN, Research Assistants, HongKong Baptist University

(翻訳) 中岡深雪 (大阪市立大学都市研究プラザ・特別研究員)
(Translator) Miyuki NAKAOKA, Research Fellow, URP, Osaka City University

大阪市立大学 都市研究プラザ
558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

Urban Research Plaza, Osaka City University
3-3-138 Sugimoto Sumiyoshi Osaka, 558-8585 JAPAN

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp>

セントラル

中環の価値の歴史地理観を超えて*

シャーティン

—「沙田の価値」を回顧する—

Transcend the Dominant Value of the Central District by Situating it in its Historical Geography: A Reversion to Shatin Value

鄧永成 陳劍青 王潔萍 郭仲元 文沛兒

Wing Shing TANG, Kim Ching CHAN, Tammy Kit Ping WONG,

Chung Yuen KWOK and Pui Yee MAN

香港浸会大学地理学部

Department of Geography, Hong Kong Baptist University

概要

本文では香港都市発展における歴史地理的観点より、香港の価値について議論することを試みた。香港の都市発展については、近年多くの研究者が重ねて提示しているような「中環の価値」だけで語られるものではなく、また価値の多元化を強調することで解決につながるものでもない。過去の都市発展における歴史空間の叙述に依拠するなら、本文は地理観への回帰を育成する。つまり香港の価値を議論することを中心課題とする。その一方で、植民地時代に建設された新小都市で形成された「沙田の価値」の再検討を行いたい。都市空間の改造を経て香港の「新人類」の価値——イメージへの信頼、「理性」を強調すること、公民であることのプライド (Civic Pride)、が形成された。こういった価値は数十年の空間生活の実践を経ており、根深く、強固な価値は今日の都市発展の議論に話題を提供している。従来の「空間が価値を創造する」という概念は今日、「価値が空間を創造する」という概念にまで発展している。文末では「沙田の価値」による社会正義への影響に焦点をあて、社会問題が更に複雑化していることだけでなく、弱者の声が埋没してしまっていることについても言及したい。

Abstract

This essay aims to respond to the current debate about 'Hong Kong core value' by investigating urban development from a historical geographical perspective. It is maintained that neither the 'value of the Central District', a recent proposition repeatedly advocated by various scholars, nor the emphasis on the pluralization of value is the cause of contemporary urban development. In re-narrating its urban story, this essay underscores geography as the key to the discussion of the Hong Kong core value. In particular, it traces the formulation of the 'Shatin value', a new value for 'a new population', as a result of the deployment of spatial techniques by the colonial government in the construction of new towns during the colonial period. The new value includes professionalism, rationalism and civic pride. After decades of daily spatial practices, the historico-geographically grounded Shatin value starts to dominate the agenda on urban development today, denoting the transition from the 'moulding of value by space' in the past to the 'moulding of space by value' in the present. Finally, the essay takes issue with the social justice of this new value, arguing that it has not only complicated urban problems but also silenced the voice of the disadvantaged.

キーワード 香港、都市史、都市の価値、中環セントラル、沙田シャーティン

Keywords Hong Kong, Urban History, City Value, Central, Shatin

*簡略バージョンは先日明報に掲載された。本研究は一部香港研究資助委員会 (HKBU2137/04H) より研究助成を受けている。ここに感謝の意を表します。

このような忘れっぽい時代においては、多くの人は都市の歴史が大局を左右する大きな力を持っているということを信じないかもしれない。近年の天^{スターフェリー}星^{ピア}埠頭、皇后埠頭^{クイーンズピア}事件の「歴史」に対する配慮が一種そのことを体現している。しかし我々は別の意味での歴史的理解を怠っているかもしれない。歴史は現在より振り返って歴史的価値を尊重しそれを付与するだけでなく、発展過程においても早くより歴史空間は一種の多層、もしくは集合的な都市の価値を構築しており、すでに香港人の日常生活に根付いている。返還後10年が経過し、香港人は自身の価値を回顧する際、この歴史地理の観点では新しく尺度を引き直す必要があるが、誰もが問うのを忘れてしまいがちな課題である。

沙田は新しい小都市として記憶されているだろうか？そこにあるイギリス植民地時代からの生きた遺跡が今日の一部の香港人の想像と価値形成の経緯を寄与してきたものなのかどうかは疑わしい。新しい小都市の三十年来の萌芽と発展を経て、沙田の価値を考察することでいわゆる「中環の価値」と比べて香港人の行為をより適切に解釈することができる。

■ 香港の「価値」議論における地理観の欠如

歴史地理の観点から見て、一種の価値(value)というのは固有の時空(time-space)条件より構成されており、いつでもどこでも岩が爆発してできたものではないだろう。このため地理あるいは空間(space)はいかなる価値が必要とされているのかを解く鍵となる。しかし長年来議論されている香港の価値については、歴史地理には最小限の関心しか払われていないようで、「価値」の背後にある事の経緯がまだ明らかにされていない場合、政治家および学者は容易にそして確実に共感をもたらす「空間という語彙」を無造作にくっつけ、香港の核心的価値を強引に語ってきた感がある。

「中環の価値」を香港の価値の中核として議論する初発弾とするには、その背景にある空間の概念は、前



世紀初頭にシカゴ学派のバージェス及びパーク(1967)らの提起したモデルと同様のぎこちなさがある。それら議論は都市の景観が中心地帯をモデルとした拡張の影響を受けているものとみなされ、朗豪坊(ランガムプレイス)の複合施設、觀塘(クントン)の巨大ショッピングモール apm、荃湾(ツェンワン)の如心広場などまさに中環のコピーによって香港がつくられているようである。ぎこちない部分とは、議論の過程において各地域の特殊な歴史環境が考慮されていないこと、「中環の価値」自身、同様のことが無理やり適用されているというところにある。

陳景輝(2006)が『明報』で中環の価値の「歴史空間化」を論じようと試み、19世紀華人社会において中環がどのように植民地としての経歴を経てきたのかを述べようとしたが、政府が近年行っている物事の処理と植民地政府はなんら変わらない。しかし、中環の地理構造の価値に対する解釈が異なり、中環の植民地意識に発生した価値と今日のこのような時空が発生した際に生まれた価値は必ずしも関係があるとは言えない。

中環の価値について論じているのは我々だけではない。地理学者の梁啓智(2005)は「洋食としての価値」という一語を提示している。彼は最も目立たない部分をさして、依然として多くの形式があり、草の根文化が有機的に成長し、それによって「中環の価値」の独壇場が可能となると言っている。しかし、「洋食としての価値」は洋食街の発展につながらず、洋食街の価値の所在がどこにあるのかも見出せない。

我々が今日提起する「沙田の価値」は、秩序、システム化、機能化、専門的なイメージを強調し、香港の中産階級の中心となる価値である。そして我々は「沙田の価値」が「中環の価値」より香港の社会状況を理解するのに容易であると考えている。沙田においてこの種の完全な中産文化が形成され、体现されていることで我々は「沙田の価値」を語っている。同時にそれは香港の発展過程における一つの時代の産物で、多くの香港人の深層心理に根深く、強固に存在する価値である。そして我々は香港の中産価値がいかに空間と時間をかけて、歴史と地理の編成を経て浸透してきたのかを提示したい。

■ 新人類計画と沙田の誕生

ある新しい街を除くと、沙田も香港都市発展における一つの段階的指標の地域である。沙田に関するストーリーは比較的早くから始まることになる。第二次世界大戦の後より英国と香港政庁の香港への関心は、香港においてどのように植民地統治を続けるかであった。当時香港では人口が急増しており、中国共産党も香港の領土に対する主権を虎視眈々と狙っていた。50年代、60年代には政府が居住区と安価な住宅を大量に建設し、觀塘と荃湾を工業都市として開発した。それによって社会動乱の根源である無宿者を吸収し、消滅させた(Smart.2006)。住民生活を規格しコントロールするため統一的な空間設計を利用したのである¹。残念ながら植民地居住区政策は、過度に密集した居住空間と大量の人口をうまく扱えず失敗に終わってしまった。逆に資本主義の影響を受けやすく、市民の連携を奪い取ったが、反政府活動のための集結は促され、50年代、60年代に市街地で起こった大小さまざまな社会動乱と暴動を促す結果となってしまった(香港政庁、1967)

1972年に新しい総督のマクレホースが着任した。これまで行ってきた統治の失敗から学び、彼は単一的な構造より群集をコントロールする方法を放棄し、文化の価値より香港の「新人類」という概念を取り入れた。マクレホースは1972年間に10年の公共住宅計画を公布し、新しい都市秩序を取り入れることを強調した。政

¹ Ip(2006)によると公共住宅は浄化運動(sanitary movement)の延長とは異なる。我々はここで身体規律の空間性(spatiality of the discipline of body)を強調する。

府は単に新しい建物を建てるだけでなく、いわゆる自給自足型コミュニティをつくらうとした。これが沙田である。沙田最初の街藍園は5、60年代にできた。低価格住宅政策より提起され、政府が63年に着手した沙田の計画で、65年にその発展大綱が通過した。ただし72年にマクレホースの植民地統治のもとで、やっこの都市が発展するに至った。70年代のはじめより政府は大量の家庭を沙田の新しい高層住宅に入居させた。第一陣はすすんで公共住宅に入居し、沙田コミュニティの発展に貢献した。1976年の人口35,000人より81年には109,000人、80年代中期以降は公共住宅以外の家屋も建設され、86年には350,000人、91年には505,000人まで増加した²。

沙田コミュニティの空間と植民者の戦略は往々にして一致していた。Roger Bristow(1987,1989)によると沙田新都心全体の空間設計は植民新都市の典型とも言える。それは人口密度の高さにも対応し、また相対的に「自給自足」とつりあった街である。沙田は「完全計画」によりゾーニング(zoning)を行い、「居住」「教育」「レジャー」及び「交通」等用途を分け、パブリックとプライベートな空間の境界線を明確にし、「新人類」の生活モデル、そしてその内容、機能を提供していた。当時すでに沙田の空間計画は均衡的な発展を強調している。それは各種住宅(公共住宅と私有住宅)、教育機関(幼稚園、小学校、中学校、高校、大学そしてその他専門学校)、ショッピングレジャー施設(新城市広場)、セントラルパーク、図書館、大ホール、文化博物館、乗馬場、城門河畔、沙田山などである。そして完全な交通網(汽車、道路、歩道など)も通っている。ゾーニングされた空間と建築設計を統一し、社会と文化活動の範囲、地理的位置、方向や感覚を指定した。多層的空間構造が各ゾーニングされた区域の役割を正常にかつ効率的に結び付けている。一つの自給自足型コミュニティが更なる沙田の空間を構成し、沙田住人の生活、住宅環境、施設及び娯楽の満足感を高めるだけでなく、市民の「コミュニティ参加」意識も高めていた。各文化とコミュニティ施設は彼らの社会への帰属意識を高め、自発的な参加と貢献を促している。新しい空間秩序は住人自身の向上によって生活レベルの改善を追及させ続ける。

■ 都市発展の中で誕生した沙田の価値

マクレホースの「新人類」計画は新都市の建設に限らない全方位的な人類改造計画である。同計画は教育意識、社会福祉、娯楽、青少年育成政策などその他の政策にも言及されており、最終的に新しい秩序を沙田の「新人類」の心理に注入することに成功した。沙田ではどのような活動もすべて空間と相対的に調和している。新城市広場で買い物をし、文化活動は図書館、あるいは沙田大ホールで行える。散策、トレーニングには城門河畔や公園、体育館に行けばよい。このほか土地は道路、住宅、工場、ビルと有効利用されており、一寸の土地もあまざりかつ混雑していない。沙田の完全なシステムができあがるにつれ、順序化、効率化とプライドが核心的な価値となっている。

沙田の計画ではすべてが段階的に行われている。まっすぐな城門と河川、広く整った道路、合理的な空間の分布、土地面積に比例して便利で充実した生活文化施設。沙田人の一人である馬潔偉(2003)が「中産沙田における平凡」の中で沙田への感想を描写している。沙田の生活は「普通でないことが珍しい」、「特に想像を掻き立てないもの」で、そこには「普段は激しく沸き立つような波があるはずもなく、驚くべきほどの崖もなく、連なって落ちてくる石もない」。沙田の人々は逆にこの種の整理整頓された生活様式を好み、政府が計画の過程で綿密に計算した良い点、優れた点を受け止めている。そして沙田住人は専門的なイメー

² この論点に関しては Castells, et al(1990)によると公共住宅の出現は空間の社会的な賃金の概念とは完全に異なる

ジを好み、行政のやり方を信じることで問題を解決している。そのような中で多くの新しい街の構造が出現しており、専門化あるいは管理をするために多くの社会問題が「専門家」による迅速な解決を必要としている。

居住区における地域、村での相互連携、相互に関心を持つ生活様式とは異なり、沙田では人々がこのように細かい独立した住宅単位の中で「わき目もふらず一心に黙々と各自が自身の安定した家庭を築く」。個人の利益は徐々に集団の利益となる。沙田の人々は個人が自身の努力と能力によって上位に行けると信じ始めている。公共住宅から最終的には私有住宅へ、不動産を所有することが人生の目標となる。私有財産の概念はこの時生まれ、かつ徐々に受け入れられるようになった。

10年、20年、30年が経過し、沙田の人々は自己のコミュニティに対して満足するようになった。一世代分の努力を経て「草の根」から「専門化」、「中産」へ、同時に沙田を自身の楽園へと創り上げてきた。新城市広場は永遠に人が集まり、そこから活力が広がり、人々は意気込みに満ち溢れている。沙田がテスト空間となり、空間構造の変化によって身分を改善することにも成功し、甚だしくに至っては彼らの都市空間、及び自らの空間に対する見方を変えた・・・以前は彼らがオールドカントニー、共産党に対して多かれ少なかれ忠誠心や懐かしさを持っていて、そうでなければ香港を受け入れられなかった。今後、彼らが香港を彼らの家とし、香港政庁を彼らの政府とし、香港社会における公民であるというプライドが確立するだろう。香港イギリス政府は「社会参加」というインセンティブを浸透させ、例えばミシェル・フーコーが言う「行為の管理」（すなわち自己統治）に到達する、つまり彼らの伝統と歴史から切り離すには、共同で美しい香港を作り上げること、帰属意識と生活に希望を持たせること、そして植民地管理を繁栄、安定させることが必要である。

■ 沙田の価値の中で誕生した都市発展

沙田は香港で最も成功した新しい小都市として手本を示し、そして大埔、粉嶺、上水、屯門、元朗などの新しい小都市も完成させた。80年代は香港新小都の発展が最も急速に進んだ時期で、とてつもなく大量の人口が市域に流入し、新界に居住するようになった。同時に80年代、90年代も香港経済発展が最も進んだ年代で、天下泰平を謳歌することが更に新都市の成功に結びついた。植民地政府の「新人類」計画は香港市民の多くの層を改造するのに成功した。今日、香港はすでに中国に返還され、植民地政府もすでに過去のものとなってしまった。しかし、70年代以降、新都心の中で成長した「新人類」も社会の各方面、各分野で専門職や管理職に就くようになった。これは香港の大黒柱とも言える。香港の都市発展は「沙田の価値」を創り上げ、ある年代の香港人に影響を与えた。この世に不変のものなどない。今日彼らにより香港の都市発展が左右され、かつ社会の各階層において彼らが心より支持する「沙田の価値観」が常に投げかけられている。

昨年末話題となった天星埠頭と鐘樓事件は「沙田の価値」の一つの現れである。大学生、20歳以上の青年が「集団回顧」を旗印に街頭で争い鐘樓を保護した時、人々は彼らの「回顧」がどこから来たのか興味を持ったはずだ。彼らが街頭デモを行ったのは回顧というが、それは公民としての一つのプライド、つまり「沙田の価値」の核心の所在と言える。

政府にとってみれば、都市計画は専門技術を要し、土地の発展は大量の統計数字を計算して分析、決定するものである。このため香港の都市発展計画はシステム化、規範化され、天星埠頭の新しい計画がすべての法律手続きを経た以上、施行するのは自然の成り行きであった。しかし興味深いのは民間人の一部の人も同じやり方で政府への抗議を行ったことである。2006年12月18日の立法会特別会議において、思

ネットワークがイギリスの鐘修理の専門家を呼んで鐘が依然として使用可能であることを説明したが、天星事件が実際市民と政府の権力上での対立によって発生した問題であるとは認めない結果となった。まさに背反する双方は理性的に順序だてて³、技術を以って政治問題化させず、再び如何に話し合うべきかを論じた。

天星事件のほか、填海、灣仔、觀塘、深水埗再開発などの社会的議論も、「沙田の価値」とみなすことができる。まさに文思慧(2006)が『社運をどうして飾り立てなければならないのか？住民の抗争は騎劫を何ぞ堪えん！』で記しているように、灣仔再開発プロジェクトを例に挙げて、まさに現在の香港のエリートはプロフェッショナルリズムを以って社会を見つめ、政治と倫理価値のかわりに技術問題を重視する。彼らは一方で道徳観より「正義」と「社会責任」を高らかに叫び、民衆のためと言う。しかも階層の力を低下させて、上層の統治者に対抗する。その一方で統治者の知恵袋として公会の仕事に携わり、その中で個人の利益を追求する。このような相反する生き方は諸刃の剣であるが、下層と上層の支持を取り付け、「中環の価値」と比べて更に香港の命脈を支配する。

■ 正義の空虚さ

香港人は往々にして沙田を香港の歴史の中で最も成功した計画として語り、沙田の人々も「沙田住民」としてのプライドを持っている。この種の「成功」と「プライド」に隠された含意は、ひょっとすると市民が階級を獲得し、階級のランクアップが一般化した結果なのかもしれない。あるいは植民地政府が集団的な主体すべてに対して経歴を消滅させ再構築に「成功した」のかもしれない。ロバート・ホーム(1997)が”Of Planting and Planning”の主旨で記しているように、植民地都市の言葉での計画(planning)と政府が行った入植(Planting)は根本的に同義である。

このような議論と相まって、我々が目にするのは植民者が空間を画策し、回顧すべき歴史を改変するだけでなく、今日めばえつつある新しい世代が都市空間を改変しようとする試みなのである。彼らの「沙田の価値」が今日無限に広がり、貧富の差の問題を「多元的特色」とし、技術的な問題などは専門的な知識で救済しようとする。これはまた別の覇権で、都市問題を更に複雑化させ、まさに影響を受けた下層階級が大衆の声の中で更に戸惑うこととなる。更にその他の地域である深水埗、天水圍などの価値も、メディアの論述の中では歪んだものとされてしまう。

スローガンの上では我々は社会正義を正視し、弱者を重視し、違った景色を探している。これが現在の社会問題を解決する方法である。実際、新しい都市が都市空間構造の制約を受け、新人類は主体を喪失し、沙田の価値は乱れている。全社会がすべて上層階級へ流動する妄想癖を持っている。事柄はすでに行動するかしないかという簡単なものではなく、数十年間、人々はすでにこのような空間生活の中で迷走している。事柄はスーザン・バック・モース(1989)がベンヤミンに対して行った評価と同様中身がない。「ベンヤミンは堅持している:我々は自身の親の世界の中からよみがえらなければならない。しかしもし家長がこのように我々に指導したら、我々はどうやって待っていればよいのだろうか？」

³陳允中(2007)は皇后埗頭事件上でも正義の順序を要求している。

■ 参考文献

- Bristow, R. (1987) *Land-use Planning in Hong Kong: History, Policies and Procedures*. Oxford University Press, Oxford and New York.
- Bristow, R. (1989) *Hong Kong's New Towns: A Selective Review*. Oxford University Press, Hong Kong.
- Buck-Morss, S. (1989) *The Dialectics of Seeing: Walter Benjamin and the Arcades Project*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Burgess, E. and R. Park (1967) *The City*. University of Chicago Press, Chicago.
- Burchell, G., C. Gordon and P. Miller (1991) *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*. University of Chicago Press, Chicago.
- Castells, M, L. Goh, R. Y-W. Kwok (1990) *The Shek Kip Mei Syndrome: Economic Development and Public Housing in Hong Kong and Singapore*. Pion, London.
- Dean, M. (1999) *Governmentality: Power and Rule in Modern Society*. Sage Publications, London, Thousand Oaks.
- Home, R. (1997) *Of planting and Planning: The Making of British Colonial Cities*. Spon, London.
- Ip, I.C (2006) Welfare good or colonial citizenship? A case study of early resettlement housing, In Ku, A.S and Pun, N (eds), *Remaking Citizenship in Hong Kong: Community, Nation and the Global City*. Routledge, London, New York, 37-53.
- Rose, N. (1999) *Power of Freedom: Reframing Political Thought*. Cambridge University Press, Cambridge, New York.
- Smart, A. (2006) *The Shek Kip Mei Myth: Squatters, Fires and Colonial Rule in Hong Kong, 1950-1963*. Hong Kong University Press, Hong Kong.
- 陳景輝, 〈城市規劃何時解殖? 再論中環價值〉, 《明報》, 2006 年 11 月 30 日。
- 陳允中, 〈政府真的諮詢了嗎?〉, 《明報》, 2007 年 4 月 28 日。
- 張家傑, 《香港六七暴動內情》, 太平洋世紀出版社, 香港, 2000 年。
- 香港政府, 《一九六六年九龍騷動調查委員會報告書》, 香港政府印務局, 香港, 1967 年。
- 梁啓智, 〈向西洋菜街學習〉, 《明報》, 2005 年 9 月 7 日。
- 馬傑偉, 〈中產沙田 甘於平凡〉, 《明報》, 2003 年 8 月 31 日。
- 文思慧, 《社運何須粉雕玉琢? 居民抗爭何堪騎劫!》, 2006 年 8 月 9 日, (www.inmediahk.net/public/article?item_id=144053&group_id=49) 。

